

「聖光上人のご法語を用いた布教の実践」

はじめに

浄土宗第二祖聖光上人（大紹正宗国師）は法然上人の法灯を正しく受け継がれ、九州を中心にお念仏のみ教えを広めてくださいました。とりわけ法然上人より相伝された内容を『末代念仏授手印』に宗義と行相を細かく示され、さらに手印をもって証拠とされました。法然上人滅後に、その門下で異義邪教を説く弟子もあらわれ水火に争いましたが、『末代念仏授手印』の裏書に見受けられるように、これらの邪義異論を排斥されています。顧みますと、今日こうやって浄土宗が興隆し、その真義が失われることなくお念仏が伝わっているのも、ひとえに聖光上人の熱い護法の念の賜物といえましょう。

であればこそ、浄土宗僧侶である私たちは、今一度、聖光上人が心血を注がれた『末代念仏授手印』を踏まえて「ご法語」をいただき、お念仏のみ教えを正しく伝える姿こそ、「然師報恩のため」「念仏興隆のため」となるといえましょう。

一、教義を踏まえた法話

法話は「阿弥陀仏に帰依し、その本願を信じ、称名念仏によって、極楽浄土へ往生を期す」その法説をいかに尊くお伝えすることです。それにまず布教伝道する者は、宗義である法然上人のみ教えに対する明瞭な理解が求められます。そこで今回は、法然上人のみ教えを正しく受け継がれた二祖聖光上人のご法語をどのように用いて身近な法話で話すのか、実例を挙げてみます。

i 各流義は雪と墨との違い

- ・「一念義」 幸西
 - ・「西山義」 証空
 - ・「鎮西義」 聖光
 - ・「多念義」（長楽寺流） 隆寛
 - ・「諸行本願義」（九品寺義） 長西
- （「白川門徒」信空、「紫野門徒」源智、「嵯峨門徒」湛空、「大谷門徒・一向宗」親鸞）

於二流之安心^ニ雪与墨程相替侍^ト 『説法色葉集』卷2
（二流の安心において雪と墨ほどあいかわりはべる）

ii 鎮西義と西山義

当流ニハ助給ヘト云、西山流ニハタスカッタリト云、深草流ニハタスケタモウト云
阿弥陀仏と 口には唱へ 心には 助け給へと 思う計ぞ 『説法色葉集』

聖光上人が説かれる「去行」の本願念仏は、すでに救われた安堵のお念仏ではありません。また、阿弥陀さまと一つに融合するためのお念仏でもありません。ただ往生極楽の為に、助けたまえとなえることなのです。

当然、三心具足して極楽浄土を願っている人が、毎朝お仏壇にご仏飯を供えながら、日々の生活に感謝してとなえるお念仏は、ごく普通の姿でありましょう。そのようなお念仏に生きる信仰の姿も法話での因縁話となります。ただ、この世は濁世で私たちは生死輪廻している罪惡の凡夫である以上、最終的に帰結するところは、「助けたまえ」と声に出すお念仏が「去行」であることを踏まえておきます。

二、法話に用いる「聖光上人御法語」と話材例

①「阿弥陀仏の正意」

阿弥陀仏は人に幸せを授け、寿命を延べ、官位を施したまうという様々の利益はみな是れ傍意なり。ただし

れ阿弥陀仏の正意は一切衆生を極楽浄土に往生せしめんと思しめすこそ此の仏の正意なり、本願にて候。
『念仏名義集』

話材1 吉川英治の名言「わずか三坪の庭でもきれいに美しくすること」

聖光上人の説かれる幸せとは、「往生浄土を得ること」はもちろんであるが、「お念仏のご縁を頂いたこと」「念仏信仰が深まること」とお念仏に縁のなかった人に説き勧めます。

②「至誠心」

第一に至誠心と申す文字をば訓に読むには、誠の心にいたすとよむなり。偽る心は実の心に非ず。かざる心は是れまた誠の心に非ず。誠の心と申すは虚仮の心なきを申すなり。

『念仏名義集』

③「深心」

我は何ともあればあれ、ただこの念仏の一脈を深く信じ取って、我が身はかかる浅ましくうたてしき身なれども、かたじけなくおわす阿弥陀仏の本願にあいて奉る。この念仏を申さば決定して往生すべしと思いとりて、更に念仏を疑わず、是れ則ち深く信に至って申す念仏なり。〈中略〉この深心をだに習いとりぬれば、三心は自然と具すと習うなり。

『念仏名義集』

④「廻向発願心」

第三に廻向発願心とは、廻向という文字をば廻し向へとよむなり、発願と云う文字をば発すとよむなり。〈中略〉世の中の人、功德善根をつくって志ねがい思い廻らすを廻向発願心というなり。

『念仏名義集』

⑤「不離仏・値遇仏」

問うて曰く、念仏三昧とは何の義ぞや。

答えて曰く、念仏三昧とは是れ不離仏の義なり。

問うて曰く、不離仏とは何の義ぞや。

答えて曰く、不離仏とは値遇仏の義なり。

問うて曰く、値遇仏とは何の義ぞや。

答えて曰く、値遇仏とは因地下位の菩薩は必ず果地上位の如来に値遇して、刹那片時も仏を遠離すべからざること、例えば嬰兒の母を離れざるがごとし。

『徹選択集』

話材2「凧」

凧が空高く飛べるのは 誰かが糸を引っ張っているから
でも凧はその糸さえなければも もっと自由に空を飛べると思っている
その糸がなければ 地上に落ちてしまうのも知らずに

産業新聞「朝の歌」詩人 宮川優

話材3「あなたが大切」日本公共広告機構

命は大切だ。命を大切に。そんなこと、何千何万回言われるより、
「あなたが大切だ」誰かがそう言ってくれたら、それだけで生きていける。

⑥「念死念仏」

先師の云く、経論の中に六念八念九念を明かすと云えども、我がごとくはただ念死念仏の二念にありと教示せられ候いき。此の一言千念よりも重し。

『浄土大意抄』

先師弁阿上人のたまわく、経論の中に菩薩の思うべきようをあかすに、六念八念十随念として、さまざまありといえども、我がごときは、ただ念死念仏の二念にありと。此の一言、千金よりも重し。

「三祖良忠上人起請文」

*「十随念」 仏随念、法随念、僧随念、戒随念、捨随念、天随念、寂止随念、死随念、身起念、入出息念

また安心起行の要は、念死念仏にありとて、つねのことわざには、出る息、入る息をまたず、入る息、出る息をまたず、助けたまえ阿弥陀ほとけ、南無阿弥陀仏とぞ申されける

『法然上人行状絵図』巻 46

話材 4 「願わくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃」西行法師

話材 5 「葉巻煙草」(出る息…煙を吐く)(入る息…煙草を吸う)

⑦「死」

聖光上人云く八万四千の法門は死の一字を説く。しからばすなわち、死を忘れざれば八万の法門を自然にこころえたるものにあるなり。

『一言芳談』

話材 6 「春は三月花のころ お前は十八わしゃ二十 死なぬ子三人皆孝行・・・」江戸都都逸

⑧「臨終」

凡そ臨終の善悪は執愛の有無による。この執愛ことさらそくしてこれをいえば、三つに過ぎず。

一つに境界愛とは男女・子息・夫婦・縁友・処居・住宅・金銀財宝これらの境界において、愛執を起こせば出離をさまたぐるなり。たとえば鉄の縄を腰にまとい、解きがたく切りがたきがごとし。

二つに自体愛とはその身の器量・学問・才能・官禄・名門・肌膚・容貌等その品に従いその分に依じて、おのが身に愛執を起こさば出離をさまたぐるなり。たとえば巖をいだいて淵にいるがごとし。

三つに当生愛とは命終わりにて後、生まるべきところを愛するなり。もし墮獄する人も、はじめは地獄と思わずして蓮華池のおもいをなして、愛をおこして直ちにおもむく。

『臨終用心抄』

i 通夜法話で「何故、阿弥陀さまの来迎が有り難いのか」を示す

ii 年忌法事の意義深さを説く

「法然上人が後白河法皇の十三回忌にあたって、御追善に六時礼讃や三部経を勤められ、以後、都の人々は皆、浄土宗によって追善法要を行うようになった」(『浄土宗の葬儀と年回法要について』)と聖光上人が示されているように、亡き人の仏果増進と還相を願って年回法要を勤めると同時に、称名念仏を勧めることは立派な布教教化になります。

最後に

最初は話が下手であっても、何も恥じることはありません。『続蓮門住持訓』には、「はじめから富楼那のような説法上手はいない」とあります。ただ、忘れてはならないのが、緊張の汗をかきながらでも、「法を伝えよう」という熱い気持ちで話すことです。そうすると必ず、話し手の真摯な姿は、聴衆の心に響くことでしょう。